
氷結鏡界のエデン 目指すはハッピーエンド

咲亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷結鏡界のエデン 目指すはハッピーエンド

【Nコード】

N7273Y

【作者名】

咲亜

【あらすじ】

これは主人公がパートナーのユリ＝ミストルティンと氷結鏡界のエデンの世界に転生し、イレギュラーを倒すために原作介入する話です。

主人公とパートナー最強系でいくのでそれが苦手な方はご遠慮下さい。文才皆無で読みにくかったり、性格や喋り方がかわってるかもなのでそれが嫌な方もご遠慮下さい。

なるべく原作をしらなくてもわかるようにしようと思っているので気軽に読んでくれると嬉しいです。

1話 プロローグ（前書き）

はじめまして咲亜です。

最近氷結鏡界のエデンを友達に借りて読んでたらはまってしまい、その日に全巻買いに行きました。

読み終わるとなぜか咲亜の妄想が止まらなくなり、その妄想がこの物語です。

1話 プロローグ

目が覚めると俺は全てが真っ白なところにいた。

「気がついたかの。」

後ろから老人の声が聞こえてきた。俺は後ろに振り返ってみるとやはり老人が立っていた。

なんで俺はこんなところにいるのだろう。俺は確か……「そうじゃ、お主は死んだ。」

そう、俺は事故に遭って死んだはず……えっ？今俺の心読まれた？！

「わしは神だからの、それくらい簡単じゃ。それよりもお主は転生してもらふ。それと転生する時にお主の願いを7つ叶えてやるぞ。」

えっ？神？？転生？？なにそれ？？

「まずわしはさっき言ったとおり神じゃ、名前はジテン。そして転生というのは、お主がいた世界とは別の世界に記憶を持ったまま生まれ変わる事のことじゃ。別の世界とは例えば、お主が女として生きている世界や、アニメなどの世界などがあるのじゃ。」

ふむふむ、すこしわかったぞ。それで俺はなんで転生するんだ？

「お主にはその世界に行つてイレギュラーを倒して欲しいのじゃ。わし等神は世界に直接介入することができないからの、だからお主を呼んだというわけじゃ。ちなみにお主に行つて欲しい世界は氷結鏡界のエデンという世界じゃ。」

イレギュラー?? えっ?氷結鏡界のエデンって俺の好きな小説じゃん。

「イレギュラーというのは、本来ならばその世界に居ない者や起こらないはずの事をそう呼ぶのじゃ。そのイレギュラーを放っておくと世界は消滅する。今回お主に行ってもらう世界のイレギュラーは世界を破滅させようとしている人のことじゃ。」

なるほど、だから俺は転生してそのイレギュラーを倒さなければいけない。

そういうことか

あと、イレギュラー倒したら俺は役目がなくなってその世界から消えたりする??

「お主は氷結鏡界のエデンの世界で普通に第二の人生を送れる。そのついででイレギュラーを倒してくれたらいいのじゃ。それに今から行く世界はお主の世界、別に原作通りにしなくてもいいのじゃぞ?その世界はお主が知ってる世界とはとても似ているが違う世界だからの。」

第二の人生か・・・氷結鏡界のエデンの世界に行くんだからやっぱり力はあるよなあ・・・

力ないとイレギュラーも倒せないしね。

まずはパートナーが欲しいかな。だってもしあの世界に行って一人だったら寂しいしね。

「どんなパートナーがいいのじゃ?アニメのキャラとかでも可能じゃぞ。もちろんお主がいた世界の住民も相手がOKすれば可能じゃ。」

「

なら、ユリ＝ミストルティンをパートナーにお願い
「ユリ＝ミストルティンは主人公の世界にあるアニメのキャラで
す。」

あれ、今なにかきこえたような・・・

「わかった。願いはあと6つ叶えられるぞ。」

2つ目はシエルティスより強い魔笛と世界で1番強い沁力を持つて
る人の100倍の沁力が欲しい。

3つ目は魔笛と沁力を制御し、術式を作ったり自由に使える力

4つ目は身体能力MAX

5つ目は戦いの才能

6つ目は技術の才能

7つ目はパートナーのユリにも能力を与えること

「ふむ、これは面白そうじゃな。しかし、4つ目の身体能力MAX
というのは無理じゃ。」

なぜならデフォルトで元からMAXになつとるからの。あとユリに
能力を与えるとんでもお主ほどは無理じゃぞ。それでもいいかの
？」

7つ目はそれでいいよ

4つ目の分は必要になったときに決める。じゃだめかな？

「大丈夫じゃ。よしではさっそく行ってもらうぞ。」

ジテンがそう言うと足元に黒い穴が出来た

[illegible]

1話 プロローグ（後書き）

2話 いろんな出会い（前書き）

2話目できました。

2話 いろんな出会い

気が付くと目の前は綺麗な青色だった。周りを見渡してみると隣に3才位の女の子がいた。

パートナーのユリだと思う。一応確認のために聞いてみた

「ユリ??」

「はい、あなたの知ってるユリです。」

やっぱりユリだった。しかしユリが3才位になってるということは・・・俺も・・・
と思い自分の体を見してみる。やはり俺も3才くらいになっていた。
あっそういうえは名前変えないとなあ・・・どんなのがいいかな・・・
・よしっこれにしよう

9

「ユリ、俺の名前は今からアリアだ。これからよろしく。」

「こちらこそよろしくお願いします。それと言葉遣い変えたほうがいいですよ?」

確かに3才くらいで、ゝだ とかはおかしいよね

「うん、わかったよ。これから気をつけるね。」

不意に
ぐう

とお腹が鳴ってしまった

「俺達さ、親居ないし、家もお金もないんだけどどうしよう・・・」

「うーん。そうですね・・・」

俺とユリはしばらく考え込んでいた

どのくらい経っただろうか

後ろの方から声が聞こえた。

「そこの二人、もうこんな時間よ、早くお家に帰りなさい。」

振り返ると金色の長髪を頭の高い位置でまとめた女性がいた。

早くおうちに帰りなさいって言われても帰る家ないんだよね・・・

「あれ、もしかして自分のお家の場所わからないのかな？」

「いえ・・・そうじゃないんですけど・・・ね、アリア？」

「う、うん。」

「どうしたの？よければ話してくれないかな？？」

『ユリ、どうしよう？』

俺は念話を使ってユリに聞いてみた

『ここは正直に言ったほうがいいと思うよ。このままだと私たち餓死しちゃうよ。』

ユリはいきなりの念話に驚いた様子なく、普通に念話で返してきた。

「実は俺達帰る家ないんです。」

すると、女の人は少し考えすぐに

「なら私の家に来ない？」

「いいんですか？」

「うん、いいよ。それにあなたたちを放っておけないからね。」

そのあと俺たちはその女の人の家に行った

女の人の名前はキリエ。そう、あの料理長でした。

そして俺たちはキリエさんの家で住むことになりました。

4年後

俺は今家から少し離れたところにある公園でユリと修業をしている。

ユリは蒼色の沁力を溜めて放出してきた。

「いくよ、貫け、蒼空一掃！」

蒼い光がこっちに向かってくる

この技は俺とユリで考えて作った沁力の結界系・降臨系・領域系・礼讃系・洗礼系のどれとも違う系統で、魔法系と呼んでいる。

なぜ魔法系と言うかは、この魔法系の元になったのが魔法だから。ユリは魔法も使えるんだけど、それは今は関係ないからいいかな

俺はユリの蒼空一掃を相殺することにした

「紅空一掃!」

紅空一掃は蒼空一掃とぶつかり公園の地面にヒビが入る。そして相殺されると、公園の地面は決れ相殺された衝撃で周りの電灯は割る。

「よし、今日はこれくらいで終るよ。」

「そうだね、このあとどうする?」
とユリが言ってユリは結界を解除する

この結界を使うと中でビルや公園を破壊しても結界を解除すると何もなかったように元通りになる。でも人や生き物は元通りにはならない。そしてこの結界は使用者の選んだ人しか入ることはできない。結界の中は外と同じように時間が進む。例えば結界の中で1時間経つと結界の外でも1時間経つ。

「今日はこれからのことについて考えようと思ってる。」

「わかった、なら帰ろっか。」

ユリはそう言い、アリアに近づきアリアと手を繋ぎ歩き出す。

家に着くとキリエさんの声が聞こえてくる

「おかえりなさい。あら、いつも仲いいわね。」

「「ただいまー。」」

「私これから買出し行ってくるからお留守番よろしくね？」

「うん、わかった。」

俺がそう言つとキリエさんはものすごい速さで買出しに行ってしまった。

アリアとユリは自分たちの部屋に入り座る

「俺たちがこの世界に来て4年、この間に調べた結果原作まであと2年というのは大丈夫だね？そして俺たちはまだ幽幻種と戦ったことも見たこともない。2年後に戦うことは決まってる、その時に幽幻種に苦戦するわけにはいかない。だから原作までの2年のうちに幽幻種と戦おうと思ってる。けれど幽幻種は居住区にはまずこない、そうなると幽幻種が出るところにいかないといけない。それをいつするかなんだけどいつがいい？俺はなるべく早く戦って強さを知っておきたい。」

アリアが言つとユリがすぐに

「原作まであと2年というのは大丈夫だよ。それと幽幻種は私もアリアに賛成かな。なるべく早く戦っておいて損はないと思う。だから近いうちに生態生育野^{ビオトープ}に行つて幽幻種を探しながら修業するっていうのはどうかな？私の転移魔法使えば生態生育野^{ビオトープ}なんて一瞬だしね。」

ユリは神、ジテンに魔法を使えるように頼んだらしい。

元々ユリは魔法があるアニメの世界で最強の魔法使いだった。

なのでそのユリからすれば転移魔法など大したことはないらしい。

「じゃあ明日から修業は生態生育野ビオトープでしょう。そこなら結界もいら
ないと思う。」

その後アリアとユリは雑談をしていた。

一週間後、生態生育野ビオトープでアリアとユリは幽幻種を探していた。

「探し出して一週間かあ…なかなか見つからないね。」

「幽幻種がそう簡単に見つかったら今頃浮遊大陸は滅びてるんじゃない？」
とアリアは笑いながら言う。

「そろそろ、休憩しない？」

もう2時間歩きっぱなしだ、俺も少し疲れた。

「すこし休憩して、今度は北の方を探してみよう。」

二人で休憩していると目の前の草むらがカサツカサツとなったので
俺は剣を沁力で具現化させ、ユリに言う

「ユリ！なにかいる！」

するとユリも剣を沁力で具現化させ構える

そして草むらから黒紫色の狼っぽいものが飛び出てきた
その狼は濃い紫色の霧を全身にまとって
幽幻種だ

これがアリアとユリのはじめての幽幻種との出会いだった

幽幻種はアリアにむかって爪を振るう。それをアリアは具現化した
剣で防ぎ幽幻種を蹴り飛ばす。幽玄種はアリア達から数メートル離
れたところに着地した。着地した幽幻種は襲ってこず、その場で立
ち止まっている。すると幽幻種は

O e / D i a " U x e p h c l e y , D i s h e l a t
e o p h e s k a o n

(, ,)

森に呪詛を思わせる奇妙な音色が響きわたった。

幽幻種のまとう紫色の霧が輝きを放つ。幽幻種の周りの地面が急に
紫色になっていき、腐敗していく。

「これが魔笛?! ユリ気を付けて!」

「うん、わかったよ。これが…魔笛なんだね、アリア! 遠距離から
攻撃するからアリアも一緒をお願い!」

確かにこれは近距離は危険だ。俺は幽幻種から距離をとる

「ユリ! タイミング合わせて!」

俺は紅空一掃を撃つために沁力を溜める

ユリは俺より少し先に沁力を溜め始めていた。
そして沁力が溜め終わり、ユリに言う

「準備完了！いくよ、ユリ！」

「「紅（蒼）空一掃！！」」

紅色と蒼色の光が幽幻種に当たる

幽幻種は周りの侵食されて腐敗している地面や樹を巻き込んで吹き飛んだ。幽幻種の中にある結晶が

パリーンとなつて砕け散ると、幽幻種は蒸発するように煙となつて霧散する。

「ふう…疲れた…」

「そうだね、疲れちゃった。」

「思ったより幽幻種は危険だね、それと一掃のおかげで腐敗していたものも消し飛んだりもとに戻ってるね。あれは沁力の塊みたいなものだから浄化もできるのかもしれない。」

「うん、浄化できるならすごく便利かもしれないね。あつ早く立ち去らないと天結宮ソフィアの人がくるかもしれないよ。」

「ユリ、転移おねがい。」

「転移、開始…」

ユリがそう言つと森には誰もいなくなつた。

2話 いろんな出会い（後書き）

次は設定を紹介しようと思っています

3話・・・じゃなくて設定です

主人公

名前：アリア・ミルメスト

性別：男

容姿：黒髪でストレート、長さは腰より少し長い、瞳は紅く、
どこからみても女の子にしか見えないが、性別は男
そこらの女の子より可愛い

能力

身体能力は世界最強LV

魔笛：シエルティスの数倍の強さ、普通ならありえない沁力と魔笛
が共存している。

なぜかアリアはエルベルト共鳴が起きない。なのでユミィや
ユリと触れることができる

沁力：世界で1番強い人の100倍のはずが1000倍ある(多分
世界で1番の人は

サラだと思うのでそのサラの1000倍)

戦いの才能：戦いに関することなら大抵のことができるようになる
才能

技術の才能：技術に関することなら大抵のことができるようになる

才能

沁力の術式の魔法系をユリと創作

魔法系とは現存している系態とは違い
その名のとおり魔法みたいな系態

名前：ユリ・ミストルティン

性別：女

容姿：金髪のストレートで腰よりすこし上位まである。瞳は蒼色
アリアより少し背が小さい。

能力

身体能力ほぼMAX

沁力：世界で1番強い沁力の人の2000倍、つまりアリアの倍ある

戦いの才能：アリアとおなじ

技術の才能：アリアと同じ

魔力：リリなので言うとEXもしくは計測不能の領域

魔法：リリなのとは違う世界の魔法の世界で世界最強だった

沁力の術式魔法系が使える二人のうち一人
魔法系はアリアと創作

用語の解説 w i k i から持ってきました

沁力

人が生まれつき持っている力。魔笛と反発し、浄化することができ
る。また、この力によって『浮遊大陸』は浮かんでいることができる。

用途によって、結界系・降臨系・領域系・礼讃系・洗礼系がある。
アリアとユリには魔法系もある。

魔笛

本来、穢歌の庭や幽幻種が持っている術式。濃紫色をしている。様
々な作用があり、単に有害なだけでなく、発狂（精神操作）する作
用もある。

幽幻種ゆうげんしゅ

体内に魔笛を保有した、穢歌の庭に住む魔物。物理的実体は霧のよ
うな体の中にある核晶のみ。これを壊すことで幽幻種を倒すことが
できるが、非常に凶暴。

また、人に対して幻影を見せたり、幽幻種自身が増殖したり、人で
はなく幽幻種に対して寄生する個体も存在する。

エルベルト共鳴

沁力と魔笛が互いに反発、共鳴しあう現象。沁力と魔笛、両方の力が圧倒的に強くなければ起こらない。

物理現象をも捻じ曲げ、電光のような火花が散る

ソフィア
天結宮

浮遊大陸オービエ・クレアの中心に聳え立つ塔で、最上階は291階。

氷結鏡界を支える中心であり、そのための巫女や護士を養成する護法院。

階級順に護士候補生 正護士 錬護士 千年獅と、巫女見習い 巫女の隊員約1200人と、備品の管理や彼らを補佐する職員およそ1万人で組織されている。

巫女

オービエ・クレアを守る氷結結界を張る巫女のこと。皇姫サラを筆頭に序列1位から5位までの計6人のことを指す。基本的に皇姫サラを除く5人のうち2人が結界の巡回を、残る3人と皇姫が結界を支えている。

巫女見習い

名前の通り、巫女の見習いのこと。一般人の中から選ばれる。天結宮の正式な隊員の証であり、巫女に続く階段でもある階級。

千年獅

結界の巫女につく専属護衛。錬護士の中から巫女の信頼が最も厚い者が選ばれる。皇姫の護衛は主天と呼ばれる。

錬護士

天結宮の護士の中でも精鋭が集まる階級。千年獅とほぼ同等の実力を有す。3年前、シエルティスがレオンと共に上り詰めた階級でもある。

正護士

天結宮の正式な護士で、巫女見習いと同じ階級。数年前まで正護士に選ばれるための制度は実績と実力のみが物を言うものであったが、制度が変更され、緊急時に部隊で協力できる護士が選ばれるようになった。

護士候補生

正護士になる前の階級。正式な天結宮の隊員でもない一番位の低い階級であり、一般人の中から立候補で選ばれる。

オービエ・クレア

地上から上空1万メートルに位置する浮遊大陸にして、この世界の名称。巨大な大陸と、無数の浮遊島^{ラグーン}によって形成される。すべては1000年前から巫女たちが唱える結界系沁力術式『氷結鏡界』によって支えられ、人はこの中でしか生活することができない。

浮遊大陸自体は以前から存在したが、1000年前に氷結鏡界が張られる前は盛んに幽幻種が侵攻し、人々を襲っていた。

また、単一民族ではなく、様々な民族が混在する多民族地域である。

いくらかの区分けされており、『天結宮』を中心に外側へ向かって、『居住区』『自然区』『生態生育野^{ビオトープ}』の3つ地区がある。沁力が発達する中で、航空機やスーパーコンピュータなど、科学技術も発展している。

わかりにくいかもしれませんがこれが限界です><

3話・・・じゃなくて設定です（後書き）

アニメ化してないので場面を想像するのがきついです・・・

用語はほとんどがwikiからもってきていて、咲亜はほんのすこしだけ手を加えました。

4話 原作介入開始！！（前書き）

やっと原作1巻の内容が始まりました

4話 原作介入開始！！

アリアとユリが幽幻種と初めて出会い、戦ってから

2年後

この2年は今までどおり修業して、たまに幽幻種と戦うために生体^{ヒョ}生育野^{トブ}に行ったりしていた。それとこの2年の間に技術の才能を使^{ヒョ}つてあるものを2つ作^{ヒョ}った。

そのある物とは、原作の主人公、シエルティス・マグナ・イールが持っている。今は違う人が持っている、機械^{イリス}水晶をすこし改造したものである。イリスとはシエルティスが持っている機械水晶の個体名である。

俺たちは機械水晶を2つ作り、俺とユリで1つずつ持つことにした。俺の機械水晶の名前はティファニア、通称ティファと名付けた。ユリの機械水晶の名前はレインとユリが名付けた。

そしてアリアとユリが幽幻種と初めて出会い、戦ってしばらくしたあと

原作の主人公のシエルティス・マグナ・イールが第二居住区にやってきた。

シエルティスはキリエさんが営んでいるカフェテラス『二羽の白鳥』(アルビレオ)で働き出した。キリエさんは俺たちをシエルティスやシエルティスと仲の良いエリエとユトに紹介しようとしたが、俺たちは天結宮^{ソフィア}に入るまで知り合いがなかった。キリエさんには俺たちのことを内緒に思っていた。なので2年たった今もシエルティス達は俺たちの名前すら知らないし、いることも知らない

いと思う。

話は現在に戻り、今日は星礼祭が始まる日。つまり原作通りなら今日氷結鏡界が破られ、数百、もしくは数千の幽幻種が襲ってくる日である。

俺とユリは今広場で星礼祭の出店を巡り歩いている。俺とユリの胸の前にある機械水晶のティファとレインが首から下がっている。そして俺の手にはいちごと生クリームがぎっしり詰まった、食べかけのクレープがある。俺はそれを食べながら

「ユリ、今日だけ大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。ね、レイン。」

レインと呼ばれるとユリの首から下がっているレインは

『はい、大丈夫です。なので心配いりませんよ、アリア』

「氷結鏡界が破られるまで存分に楽しまないとね。」

せっかくの祭りなんだしね。それに、今日の事件が終わったら俺達は天結宮ソフィアに入るつもりだから、これからあんまり遊ぶことができる。

「アリア、あっちも行ってみようよ！」

ユリはそう言い俺の手を取り走り出す。

その頃シエルティスは

「シエル兄、起きてー。お祭り始まつてるよぉー!」

「……あと1時間だけ寝かせて。昨日遅くまで店の片付けしてて寝不足なんだ。」

「やーだー、早くいかないとお祭り終わっちゃう! ほら早くー」

星礼祭3日間続くから今日じゃなくてもいいんだけど…

そう心の中で呟いて目を開けると悲しそうにしているユトと目が合ってしまった。

「シエル兄…一緒に、来てくれないの?」

「えっ…ええと……」

「ユトと一緒に行くの嫌い?」

「いや…そんなことは…ないけど……わかったよ、行くよ。」

僕はそう言いベットから飛び降りた。

皇姫に捧げる三日間の星礼祭は、第二居住区で行われる。

広場には星と月を描いた旗や浮遊大陸に吹く風を象徴とする風車と風鈴という儀式的な装飾。それよりやや庶民的な趣きが強いのが大

通りで、こちらは極彩色の風船やリボン、そして通りを埋め尽くす
出店で賑わうのが一般的だ。

「おつ、本当に始まつてるんだ。開会式前なのにすごいね。」

「あー、シエルティス！おそーい、待ちくたびれたじゃない。」

ツナギ姿の少女、エリエは右手にクレープ、左手にわたあめを持っ
ていた。

「…さつそく楽しんでるね。」

「楽しみながら待っていたのよ、あつ、このわたあめユトにあげる。
あとお小遣いあげるから好きなもの買ってきていいよ。」

しばらくして、

「エリエ、そろそろ祝砲の時間じゃない？」

氷結鏡界の祈り。皇姫の期間が終わり、結界の統制権が巫女へと譲
渡される。それとともに天結宮^{ソフィア}から祝砲が上げられ、星礼祭が正式
に始められる。しかし

「あれ、おかしいわね。」

「どうしたの？」

「えっとね、もう予定の祝砲時間すぎてるんだけど。」

祝砲がない。それはつまり氷結鏡界の統制権の譲渡が終わってない

ことを意味する。それは本来ならば有り得ないことだ。氷結鏡界の維持は浮遊大陸^{オレビエ・クレア}の存在に関わる一大儀礼。この譲渡に監視時間管理は何より厳格なはずだ。まさか何かがあった？

「……ユミイ」

シエルティスは巫女である少女の名を呟き塔を見つめる。

「そろそろ始まるよ。」

アリアが言う始まるは星礼祭のことではない。今日これから起こる事件のことだ。アリアがそう言うとは居住区に念話が聞こえてきた。

『巡回中の巫女および千年獅の2組、お疲れ様。それに居住区の皆様、お元気？巫女のメイメルよー、突然だけどみんなにとっても大事なお知らせがあつて、こうして念話でお邪魔させてもらってるわ』

「ユリ、準備いい？始まるよ」

「うん、大丈夫」

『突然の報告だけど落ち着いて聞いて
歌の庭を封じていた氷結鏡界が幽幻種に突破されたわ。』
たっ たいま、穢^{エデン}

すこし間があいてまた念話が聞こえてくる

『既に万を超える幽幻種が浮遊大陸を目指して上がって来てるわ。
ハッキリ言うところと一時間も立たないうちにこの浮遊大陸は幽幻種
の大群に襲われる。』

また少し間が空いて念話が聞こえてくる

『現状は理解した？そこで居住区にいる住民の皆さんにお願いよ。
今から30分以内に緊急用の地下シェルターに隠れなさい。天結宮
の護士たちが、そこで命を張って防衛します。いいわねー？』

念話が中断するとアリアは呟いた。

「あー、緊張するなあ。」

「そうですね。」

たしか原作だとこのあと皇姫のサラから”あと3時間くらいならわたしも氷結境界を一人で支えられる”みたいなことを言ってたはずだから、3時間以内に幽幻種を殲滅しないといけないのか。

個体の強さによるけど数百や数千なら3時間で終わるはず、というか原作だと終わってシェルティスが天結宮でユミィと再会している。

「第三居住区に行くよ！」

そう言うところ二人は緊急用の地下シェルターに避難せず第三居住区に向かって走り出した。

悲鳴や怒号が大通りに満ちていた。出店も何もかもそのままで逃げ出す者、はぐれた家族、恋人を探している者。その人ごみが避難シエルターの方向へ駆けていく。

「…最悪だ。思っていたよりもずっとひどい。」

「ね、ねえってばシエルティス！あたしらどうすればいいのよ！？名メルって巫女様が言ってたとおりに避難するの？」

「一般人は従うしかないよ。」

シエルティスは昔、天結宮^{ソフィア}で護士をしていた。そして穢歌^{エテン}の庭に落ちた。その１年後シエルティスは浮遊大陸^{オビエ・クレア}に戻ってきた。その後天結宮^{イデア}から追放され居住区に逃げてきた。そこでキリエやエリエ、ユト達と出会ったのだ。

キリエはシエルティスが昔護士だったことを知っている。だからなのだろう、キリエはシエルティスに避難するのと言った。しかしシエルティスは自分のことを一般人と言った。

そういえばユトは一人で楽しんでいたはずだ。

「…とにかくユトを探さないと。」

「シエル兄ー！」

ユトがシエルティスと呼ぶ声が聞こえる。シエルティスは声が聞こえた方に向かって行く。すこししてユトを見つけた。

「ユト…よかった、ここにいたんだ。」

「シエル兄、この人たちどうしたの？」

慌てて逃げる周囲の人々をぽかんと眺める少女。星礼祭を楽しむあまり、巫女の話聞いていなかったのだろう。

「ううん、いいんだ。それより早く逃げるよ、おいで！」

シエルティスはユトの手を握り早足で歩き出そうとし

「…えっ？シエル兄にげるの？」

ユトは手を握ったまま動こうとしなかった。

「うん、時間がないから後で説明するよ。とにかく避難シエルターに隠れないと。」

「ユト、シエル兄と一緒にいい」

「わかってる。一緒にシエルターにいてあげるから。」

「ううん、そうじゃないの」

ユトは首を横に振る

「シエル兄は、守ってくれないの？」

「え？」

「ユト、シエル兄と一緒にならシエル兄に守ってもらうのがいい。」

「…僕が？」

シエルティスは足を止める

「守ってもらうならユトはシエル兄がいい。シエル兄、前の公園でも守ってくれた……」

……僕が、幽幻種からだれかを守る？

……天結宮^{ソフィア}から追放されて何もかも失って、もう巫女^{ユミヤ}と合うことすら許されない僕が？

「シエルティスどしたの？」

「い、いや……なんでも……ない、よ。」

「もう、シエルティスってば、突っ立ってないで早く行くよ！あたしたちの避難先ってたしか第6シエルターだね。距離あるから急がないと。」

避難？本当にそれでいいの？ただ守ってもらっただけで？

胸の中でなんともなんともこだまする自分の声。

もう天結宮^{ソフィア}に関わることにすら許されない。かつての幼なじみの少女は今や浮遊大陸^{オリビエ・クレア}を守る巫女。かつての友人も巫女を守る千年獅^{ライバル}。二人とも浮遊大陸で崇敬される人物だ。

かたや自分は、もはや居住区に住む一般人。

自分にできることはただ一つ。ユミイが巫女として、レオンが千年獅として無事にやっていけることを居住区から祈るだけ。

……そんなこと、2年前に痛いくらい胸に刻んだはずなのに。

そのはずが、胸にこびりついて離れないもどかしさは何なんだろう。

「ユミイ……」

シェルティスは人の流れに逆らって振り返った。

どこまでも多角伸びる白亜の塔を。

第三居住区

ソフィア

居住区の中で天結宮から最も離れたところにあり、自然区と隣接した場所だ。商業が活発な第二居住区と違い、こちらは集合住宅がならぶ賑やかな住宅街としての色が強い。

その第三居住区には人影のただひとつも見当たらなかった。

「通りに人影なし。家も……だれもいねーな。とりあえずおおかた避難したか。」

しんと静まり返る街路に行く数重の足音

ロングコートにジャケット、ドレス。装いこそ異なるが、だれもが純白の儀礼服を纏っている。

ソフィア
天結宮の護士そして巫女候補生。

大剣、重鎗といった近接武器に加え、破碎弓、投擲機、銃火器。誰もが何かしらの武闘、沁力術式において浮遊大陸有数の実力者だ。

「静かー。ねえ爛、いまなら勝手に家にお邪魔してもバレないかしらー？」

「メイメル、茶でも飲んで休憩か？まだ何も終わっちゃいないぜ。」

ソフィア
天結宮の第二師隊。

しばらくして、メイメルに念話が来た。

「たった今、自然区と生態生育野に散っている巫女二人から念話があったわ。」

「なんて？」

「抗戦中とだけ。とにかく幽幻種の数が多すぎて……『何千体かに突破された、居住区に向かっている。』と行ったきり交信を着られたわ。もう念話に力をまわす余裕もないみたい。万の幽幻種なんて……もしかしたら浮遊大陸は滅びるかもしれないわ。」

シエルティスは無人となった第二居住区にいた。

「さ、急ぐよ。遅れたらシエルターの扉閉まっちゃうんだから！」

エリエが肩で息をしながら声を張り上げる。

そんな彼女のすぐ後ろには、三輪ヴィークルがけたたましい起動音を吐き出して出発の時を待っていた。

通りに設置されている時計塔を見る。とつくに幽幻種が浮遊大陸^{オイビエ・クレア}に上がりきった時間だ。天結宮^{ソフィア}の護士たちが居住区直前で防衛戦を張り、侵攻する幽幻種と抗戦しているはず。

……けど、本当に立ち向かえるのか？

……メイミルという巫女が言うには数千を超える幽幻種という話じゃないか。

抑え切れる数じゃない。せいぜい居住区の人間が避難するまでの時間稼ぎが精一杯。いや、あるいはその時間稼ぎすらもたなくても不思議じゃない。一躰でも脅威となる幽幻種、それが数千体以上。それも結界を破ったやつだ、通常の個体より強力なものがいると考えるべき。本当は一人でも火星が必要なはず。

「シエルティス？」

心配そうなエリエの声にも、ただ黙って頷くだけが精一杯だった。

”シエル兄は守ってくれないの？”

……なんでだろう、頭からさっきの言葉が離れてくれない。

突然、地面がひっくり返るほどの衝撃が走った。

ゴオオオツ……と唸る地鳴り。

一瞬遅れて、何か巨大なものが崩れた音が津波のようにやって来た。

「まさかッ

」

振り返った方向は、はるかに離れた第三居住区。

数十階はあろう巨大なビルが内部から黒い霧を吹き出して倒れていく。

その周囲までも続けざまに家屋が崩れていく光景。魔笛に侵食されて腐り、ドロドロに溶け落ちていく。

「まずい、もうそこま

」

言いかけたエリエが凍りつく

第三居住区の邦楽から風に舞い上がる濃い紫色の霧。

「霧なんかじゃなくて……あの点一つ一つがみんな幽幻種？」

空を真つ暗に覆い尽くす幽幻種の群れ。翼を持つ個体そのものは稀であるが、あの獣は身体を霧状にする特質を持つ。そして今、風は天結宮へと吹いている。今幽幻種が風に乗れば、天結宮の地上まで一気に侵攻出来ることになる。

「シエル兄、怖いよ。」

幽幻種の大群は第二居住区など眼中になかった。あの不気味な獣たちが侵攻するほうがくはただひとつ、天結宮だ。ソフィア

氷結鏡界を支える天結宮。ソフィアそこだけを目指して幽幻種たちは進んでいた。

…そうだよね。

「怖い…よね。」

きつと誰でも怖いはずだ。皇姫だって巫女だって、千年獅だって怖いはずだ。本当は誰だって逃げ出したい。

だけど、それでも

「ユミイは……逃げないんだよね。」

巫女は逃げない。最後の最後まで天結宮を守り続けることが使命なのだから。ソフィア

レオンもそうだ。あの男が退くはずがない。守るべき巫女が天結宮にとどまる限り、命をかけて守り続けるのが千年獅の役目なのだから。ソフィア

……あの日の約束も、そうだった。

”ユミイが巫女になって僕を守ってくれるって言うなら、僕だってユミイを守る千年獅になる。そうすれば一緒にいられるでしょ？”

”だから泣かないで、ね？だいじょうぶ。塔の1番高いところまで、絶対ユミイのところまでいくからさ“

そんな約束に憧れていた。

……行こう。

すこし離れたところから巨大なビルが倒れながら蒼色と紅色の光が見えた。そのひかりともに

ドゴオオオツ ン

巨大な地響きが聞こえてきた。しばらくすると周りのビルは跡形もなくなっており、その場所だけ幽幻種がいなくなっていた。

「二人とも、怖い重いさせてごめん。でも もう大丈夫だから。全部終わらせてくるから。」

「ちょっと！シエルティスどこ行くのよ！？」

「エリエとユトはシエルターに逃げてて。僕忘れ物取りに行ってくる。」

剣も友人も思い出も、何より大切な彼女との約束を。

二年前、全てあの塔に置いてきた。

取り戻しに行こう。

「そうだよ。なにが追放だ。」

「シエルティス何勝手に歩き始めてんのよ、早くヴィークルに乗りなつての。」

「ごめん、僕のことは放っておいて二人は先に避難」

「だ、か、ら、そうじゃなくて！天結宮ソフィアに行くんでしょ？それならさっさと乗りなさいっての。送ってあげるから。」

「えっ？」

「ここから走ったって間に合わないでしょ。ほらユトもこっちおいで。」

ユトを後部座席にのせたエリエの姿を見てシエルティスは我が目を疑った。

「な、何言ってるのさ！上の幽幻種がどこ向かってるか見てみなさいよ。今の天結宮ソフィアは危ないなんてもんじゃにんだって！」

「だってシエルティス行くんでしょ。正直怖いけど、それなら付き合っわよ。」

「…ありがとう。」

「よし決まり。それじゃあ出発、天結宮ソフィアまで最速で突っ込むよ。」

「……エリエ、全部終わったらユミィのこと紹介するよ。友達になつてあげて。」

「おおっ?!それ嬉しいかも!」

ヴィークルは動き出した。

「ふう…疲れた…」

「ふう…そうだね。どのくらい倒したかな?」

ユリがそういうと首にかかっていたレインが答える。

『およそ300体くらいです』

アリアとユリがそう言っていると、二人の周りに幽幻種が沢山現れて、二人を囲んでいた。その数今まで倒してきた数と同じくらい…もしかはその以上、アリアは自分たちを囲んでいる幽幻種を見渡した。

「ユリ、一掃しよう。本気で撃てばこのくらいどうともなるはずだから。」

「そうだね、これ以上一体一体倒してたら疲れて死んじゃうしね。それじゃあカウントするよ?」

ユリはそう言っているとカウントを始める

「10、9、8、7、6、」

カウント共に風が巻き起こる。

「3、2、1…」紅（蒼）一掃！！」

周りにいる幽幻種に向かって飛び出す光、幽幻種にあたると幽幻種消滅していく。二人が一掃を撃ち終わると周りには何もなくなっていた。ビルも幽幻種もすべて。

「今の音はなんだッ!？」

爛は音がした方を振り返ると、蒼色と紅色の光が天高く伸び、その光が周りのビルを巻き込んでいる光景が目に入った。

「なっ……なんだあれは…あれは敵なのか？それとも味方か？」

光が無くなるとさっきまで明るかったのが途端に暗くなった。そして黒の空。幽幻種の体から噴き出す濃い紫色の霧によって太陽光が遮られ、周囲の視界がみるみる悪化していく。

1メートル先もみとせないほどの闇色に周囲が染まり…

『各位、邪魔な霧を吹き飛ばすから眩しいわよ』

メールからの念話

直後頭上を照らす猛烈な輝きに爛は両目を細めた。

メイメルの大規模な沁力結界が展開
上空に停滯する霧をはじ
き飛ばす。

見えてきたのは何十体という数の幽幻種。大きな子猫から獅子まで、どの個体も霧状の身体から四肢が見え隠れする地上歩行型だ。

Oe/Dia||Uxeph
 pheskaon
 cleey'Di
 shela
 te

魔笛、幽幻種の有する特異の力だ。が

「遅い！」

魔笛の紫光が放たれるより先、爛は幽幻種の懷まで飛び込んでいた。人外とも言える反射神経と筋組織を有する少女の疾走は、その初速で可視速度を凌駕する。

爛は幽幻種に拳を叩き込む。

その拳は幽幻種のまとう霧をも吹き飛ばし、その奥にある結晶へと突き刺さる。

悲鳴を上げて消滅する幽幻種

「それにしても……狙いはあくまで天結宮ってか？」

爛は一人で数十体は削ったし、いま目の前には数体の幽幻種。しかし厄介なのは自分たちを標的としていないことだ。常に自分たちを避けるように迂回して天結宮^{ソフィア}へ向かって突進していく。現に、爛の知るだけで数十体がこの防衛ラインを超えてしまった。

全体ではどのくらいの数が天結宮^{ソフィア}に向かったかもはや数得ようという気も起きない。

それにさっきの蒼色と紅色の光も気になる。あんなものは今まで見たこともない。ただの一撃で周辺を吹き飛ばすほどの威力。

……今はそんなこと忘れておこう。今はまだ戦闘中だ。それにこれ以上通すわけにはいかない。

刹那、

「あ……っ……あ……？……ア……アアアアア……アアッ
ツツツ！」

狂気に満ちた声。

両手に構えた双剣を周囲構わず振り回し、敵味方構わず斬り付ける。その後頭部に濃い紫色のきりがベッタリとまとわりついているのがかすかに見えた。

「……精神操作かッ！」

魔笛の作用の一つで、呪いを与えた相手を恐慌状態に陥れる力だ。直接死にかかわる能力でこそないが、混戦においては腐敗や猛毒以

上に危険な場合がある。特に感染者は鍛え抜かれた護士だ、錯乱状態で剣を振り回すだけで脅威となる。

幽幻種の侵攻を許すかたちになるが、この作用だけはまずい。焦る気持ちをこらえて部下に向き直り

「いまは浄化なんてしてる場合じゃない。」

目の前に鳶色の神の少年がいた。

突然の乱入者に周りの退院たちが声をかける間もない。天結宮の剣士が剣のことごとく紙一重で躲し、少年が一瞬でその背中へ回る。そして。

とん。

後頭部を揺さぶるように殴打されその剣士は気を失って地に伏せた。

「混戦での精神操作ならとにかく気絶させるのが手っ取り早い。そうでしょ？」

にこりと微笑む少年

「え？…あ、ああ」

たしかに少年のやった方法は欄も知る方法である。だが同時に、天結宮の剣士相手に背後をとって昏倒させるそれがどれだけ困難を極めるかも知っている。

それを、こいつはした。こいつはだれだ？

剣の攻撃範囲を知り尽くしたように攻撃を誘導し、流麗な体さばきで剣を捌く。あれと同じことができるものが千年獅を除いて天結宮ソフィアの中にどれだけいるだろう。

「おい！お前……」

ただものでないのは明らか。こいつは一体？

「じゃ、ここ任せだから。」

「あ、おい待て、てめえ逃げんな！」

少年は逃げるように背をひるがえす。駆ける方向に明らかに改造を施した巨大ヴィークル。

「なにしてんのシエルティス！寄り道してる場合じゃないでしょ？！」

シエルティス？

その名前には聞き覚えがあった。それもごく最近。そうユミイが言っていた。

”シエルティスは、わたしの幼なじみなの“

「まさか…、おい、お前ユミイの　　っ！」

……まさかあいつが、穢歌の庭^{エデン}におちたっていう。

「しえーるーていーすー？急ぐのか寄り道するのかはっきりしてほしんだけど？」

シエルティスはヴィークルに飛び乗った。

「ごめん、天結宮^{ソフィア}に入る前に使える武器がどうしても欲しくて。」

シエルティスという名前の少年はヴィークルに乗り天結宮^{ソフィア}の方へと消えていった。

あいつは…シエルティスというやつはいいたい…

今は敵に集中だ。爛は幽幻種へ向かって飛び出す。爛は幽幻種を拳で貫きどんどん倒していく。

「「「あ……っ……あ……？……ア……アアアアア………アア
ツツツツッ！」「」」

後ろの方から聞こえてくる狂気に満ちた声。もう聞きたくない声。しかも今度は3人もだ。

「ち、また精神操作か、それも3人も同時にかよ……」

爛は精神操作された部下に向き直り飛び出そうとした瞬間

シュツ とん、とん、とん。

とん、という音と共に精神操作された部下は倒れていく。おそらく気を失ったのだろう。

目の前には黒髪で腰より少し長くストレートで紅い瞳をしている可愛い少女が立っていた。

「い、いまのお前がやったのか？お前はなにものだ？」

同時に遠くから少女の声が聞こえてくる。

「アリアー！まってよぉー！」

遠くから走ってきた少女は金髪で腰より少し短いくらいのストレートで蒼色の瞳をしている。この少女も可愛かった。その走ってきた少女は黒髪の少女をアリアと呼んでいた。

「その黒髪の少女、お前がアリアか？そしてその金髪の少女、お前の名前はなんだ？」

するとすぐにアリアと呼ばれている少女は言った。

「俺は男だッ！！」

なっ、男だと……私より可愛いのに……

「私はユリ、ユリ・ミストルティンです。」

金髪の少女はユリと言っらしい。

「俺はアリア、アリア・ミルメスト。性別は男だ！」

やはり、アリアは男らしい……

それよりも

「お前、アリアと言ったな。さっきのはなんだ？」

アリアは答えた。

「あれは普通に移動して後頭部を叩いただけだよ。」

「そ、そうか……って普通に移動ってなんだよっ！なんだよあれ！それにお前達は護士じゃないよな？お前たちはなにものだ？」

アリアとユリは白い儀礼服を来ていない。それにみたところ10才も行っていないくらいの子だ。ただものじゃない。

「俺達は

」

アリアが答えようとした瞬間、幽幻種の声が響きわたった。その声に周りを見渡してみると数十体、もしかすると百以上の幽幻種がいた。その数に隊員は驚き、恐怖し慌て出す。しかしさっきやってきた二人は驚きはしたものの、恐怖したり慌てたりはしていなかった。

ユリがアリアに向けてだろう、一言言った。

「一掃するよ！カウント！5、4、」

ユリは一掃するといい、カウントを始めた。この状況でののだ。おそらく攻撃の準備だろう。

「わかった。」

アリアが一言言い、構える。構えたところにいきなり剣が現れ、その剣の先に光が集まっていく。

この光は　沁力？なぜこの少年がこれほどの沁力を……と考えていると、カウントをしてい少女も剣を握っており、その剣の先に光が集まっていく。そして少年の光は紅色に光だし、少女の光は蒼色に光り出していく。

……この光は確か……そう、さっき遠くの方で蒼色と紅色の光がビルを巻き込み天高く伸びていた光と同じ色。まさか、さっきのもこの二人が？！

「2、1、0」「紅（蒼）空一掃！！」

剣の先に集まった光が幽幻種の大群に向けて飛んでいく。その光にあたった幽幻種は次々に消滅していった。その光は幽幻種だけでなく周りの建物も巻き込んでいく。それを見た爛と爛の隊員は驚きを隠せなかった。

「な、なんだそれは！！」

爛は訳も分からず叫ぶ。

それもそのはず、自分たちが一体一体相手して倒していつていたのを百位の数の幽幻種を一撃で倒したのだ。

「これは沁力を使った魔法系の術式です。」

え？魔法系？なんだそれは……沁力の系統は結界系・降臨系・領域系・礼讃系・洗礼系の5つしかないはず……

「魔法系ってなんだ？！沁力の系統は結界系・降臨系・領域系・礼讃系・洗礼系の5つのはずだ。」

爛が聞くと今度はユリが答えた。

「魔法系というのは、私とアリアが創った新たな系統です。」

創っただと？しかもこの10にも満たない二人が……

すると空に小型の竜ほどの大きさの大型の飛行型の幽幻種が飛んでいた。

「なんだ、あの幽幻種は……」

あんな大きさでしかも飛行型？あんなのが天結宮ソフィアにいったらやばい。

「あ、あれは、統率个体？！ユリ！天結宮ソフィアに行くよ！」

「統率……？」

幽幻種は個々が独立した存在。小さな群れを形成した時だろうと、

そこに統率役の幽幻種がいたという報告は聞いたことがない。

「今回の幽幻種の行動は天結宮^{ソフィア}の巫女と皇姫を狙うという極めて一缶した行動理念が見て取れる。氷結鏡界の譲渡する瞬間という氷結鏡界の弱点をついた結界突破から始まって、強力な個体を天結宮^{ソフィア}への侵攻に集中させるなど、強力な統率意思が背後に存在すると考えられる。そしてこれがおそらく統率個体。」

「なるほど…な。」

「アリア！天結宮^{ソフィア}行く準備出来たよこっちきて！」

ユリが言うと同時にアリアはユリに抱きつく。

次の瞬間二人の足元に奇妙な模様が現れた。

「じゃあ、ここ任せたよ。天結宮^{ソフィア}は俺たちに任せて。」

次の瞬間、二人は光に包まれ消えた……

4話 原作介入開始！！（後書き）

なぜか異常になくなってしまいました。

他の作者様に比べたら短いかもしれませんが、咲亜にとってはとても長い1話になりました。

今回はシエルティスたちの出番が多くてアリアとユリはあまり出番がなかったと思います。それと今回なぜシエルティスたちの出番が多かったかというと、それは小説の文を引き抜いたりしてたからです。

本当にダメな作者ですいませんm（——）m

次で、幽幻種侵入事件をおわらせることができればとおもっています。

できれば、アリアとユリが千年獅と巫女になるところまで行けたらいいなと思ってます。

5話 新たな千年獅と巫女（前書き）

これから頑張つてオリ主の出番を増やしていけたらなと思つています。

これから原作崩壊するかもしれませんが、崩壊するまではちよくちよく小説の内容を丸写しするかもしれません・・・

しかし！そこにオリキャラが入るとそれはオリジナルストーリーではないのか？と思つてしまいました。これは悪いことなんでしょうか？文才無い咲亜は小説を移すうちに少しずつ文才が・・・あがるということです・・・

ユリ「咲亜の話は置いて、本編始まります！」

咲亜「ちよつとまつて！私の愚痴を聞いてくれないかな……」

ユリ「えっ、な、泣かないでください。愚痴聞きますから」

咲亜「えとね…私の家自営業で居酒屋してるのね、すこし前までバイトしてたんだけど、親と一緒にいるのが嫌でバイトやめたのね。そして今日時給UPするから働け！とか言つてきて、時給低いからやめたんじゃないんだけど…あんたを見たくないからやめたんだけど…」つて思つたんだ。それで嫌だ。つて言つたら「今家族崩壊の危機なのに働かんのか！？」みたいに言われて、そんなんで家族崩壊するなら絶対しないで崩壊させてやるつて考えていたら次は「家族が困つてる時に、手伝つてくれんなら、こつちもお前を困らせるしかないぞ？例えばPCのネット切るぞ？」とか脅してきたんです。それにあんたなんか家族じゃないんだけど?!つて思つたの。それ

にこの父親らしきものは今まで私に酷いことしてきたので夏休みの時に家出してたくらいです。こんなの父親とかいえますか！？酷いと想いませんか？！その脅しのせいで…私の自由時間が…小説書く時間が…う、うわあああーん……ぐす…」

ユリ「咲亜、よしよし、泣き止んで、そして筆持つて続き書いてね。さて、それでは本編始まります。」

愚痴を言ってる咲亜の文法が変でも許してください。本当に愚痴を言ったらこうなりました。そしてこの愚痴は事実です。励まして欲しいです…

5話 新たな千年獅と巫女

ソフィア 天結宮の護士から双剣を借り・・・奪ったシエルティスはエリエ、ユトとヴィークルで天結宮^{ソフィア}に向かっていた。

疾走するヴィークルの机上で鞘を路面に投げ捨てる。青く煌めく氷の刀身 氷結鏡界の蒼氷を材質に用いた剣であり、それ自体が強力な沁力を帯びている。

「へえ、水晶みたいで綺麗。天結宮^{ソフィア}の護士はみんなそんな武器使っているの？」

「大体はね。とにかく沁力を帯びていないと幽幻種には効かないし。」

ソフィア 会話しているうちに天結宮^{ソフィア}の敷地を駆け抜ける。敷地には芝生が敷かれており、その芝生はどす黒く変色し腐っており、外壁と防壁は溶け落ちていた。すでに天結宮^{ソフィア}も幽幻種の侵攻を受けたのは確実。何体の幽幻種が潜んでいるかもわからない。

「で、どこ行くの？正面ゲートから一階に入っちゃう？」

「だめ。そっちは防衛ラインが敷かれているはずだから」

ソフィア 一回は全体が巨大なロビーだ。天結宮^{ソフィア}に侵入した幽幻種を迎え撃つには一番効率がいい。鼠一匹許さない厳戒態勢が敷かれているはず。

「エリエ、次の分岐路を右！塔の外壁に沿ってぐるっと回り込んで！」

「あいよつと」

眼前を埋め尽くす巨大な塔を、外周をなぞるように機体が駆ける。

なにしろ直径だけで数百メートルを数える建造物だ。

「って、どこまで行けばいいのよ？正面ゲートじゃないなら東と西のサブゲート？」

「ううん……あ、いま見えてきた赤い扉！そこまで行ってヴィークル止めて！」

塔の横壁に取り付けられた両開きの扉。

「パス、変更されてないといいんだけど……」

とボラの脇に取り付けられた電子画面へ、数十桁に及ぶ複雑な解除式を入力。電子錠によって閉じられていた扉の密閉が解け、両開きの扉が左右に開いていく。

「ふうん、昇降機エレベータじゃないわよね、やけに外壁の作りが頑丈そうだし」

コン。横壁を叩いてエリエが反響音に耳を澄ませる。四方が壁に覆われた密閉空間。足元の床だけは淡い色合いのカーペット、残りの壁はすべて無機質な金属地だ。

「この機械音……これ、まさか射出機カタパルト？」

「うん、何百キロある積荷を240階のホールまで射出する機械砲台らしいよ。人用の設計じゃないけど今はそんなムチャもしなくちゃいけない状況だから。」

振り返るその先で、重厚な金属扉が口を閉じていく。

もう戻れない。

240階から最上階まで、あとは上がるだけ。

アリアとユリが転移した先は天結宮ソフィアの291階、そう最上階だ。

目の前には、蒼く輝く氷の世界がどこまでも広がっていた。

天結宮ソフィアの291階は『楽園』と名付けられた最上階。

天井も横壁もない、どこまでも延々と続く無限の空間がそこにはあった。

そう、まるで別世界だ。

遮るもののない頭上には白夜に似た光があふれ、青の輝きの下には大樹のごとくそびえ立つ蒼氷の氷壁がどこまでも連なる光景。氷壁の表面はあらゆる宝石よりも鋭く美しく研ぎ澄まされ、鏡のごとく世界を映す。

……息が凍る。

あらゆる防寒具も意味をなさない。あらゆる生物、あらゆる物質、そして幽幻種。全て例外なく凍てつかせ、その心と時を封印する沁力術式

氷結鏡界。

「思ったより寒い…」

寒気に耐えながら、蒼氷の連なる回廊を進んでいく。やがて氷の連峰が途切れる。と同時に、周囲を駆ける氷雪混じりの強風も静まった。

天結宮^{ソフィア}の最上階『楽園』、その中心に水晶の形をした巨大な蒼氷結晶。

淡く透きとおった結晶の中心に、ひとりの女性が閉じ込められていた。

蒼氷の奥で、彼女の待とう純白の法衣がぼんやりと浮かんで見える

皇姫サラ

全てを凍てつかせる蒼氷に自ら身をゆだね、たった一人で氷結鏡界を祈り続ける女性。

「サラ、俺達は現時刻を持って、ユリは巫女となり、俺はそれを守る千年獅として活動する。」

アリア、ユリ、これからよろしく願いますね。

なぜこうなったのかというと、そう、それは1年くらい前のある出会いから始まった。

1年前の俺達は公園で結界を張って修行していて、いつもどおりの一日になるはずだった。しかしその日は違った。その日は結界の中には3人いた。そのうち二人は俺とユリ。で、結界の中にいたもう一人というのがサラだった。サラはどうやって結界の中に入ったのか走らないが、ほぼ最初から最後まで見ていたらしい。修行が終わるとサラが出てきて言った。

「あなたたちはとても強い沁力を持ってますね。それも私よりはるかに多い量の沁力を。見たところ天結宮ソフィアの人たちではないようですが、名前を聞いてもいいでしょうか？あ、私の名前はサラといいます。」

これが最初の出会いだった。

その時はすこし話をしただけだったけれど、それからちよくちよく会うようになった。そしてそれから何ヶ月か経った時のことだ。俺達は、数ヶ月後に氷結鏡界が破られ、幽玄種が襲ってくることをサラに伝えた。

するとサラは

「もしよろしければ、天結宮ソフィアで巫女と千年獅になりませんか？」

サラは俺たちの修業を何回か見ていた。そして俺たちの力を認めてくれたのだらう、俺たちを巫女と千年獅に誘ってくれた。

そう、これは普通なら有り得ないことだ。なぜなら巫女になるには普通最初に巫女見習いとして天結宮ソフィアに入らないといけない。巫女見習いになるだけでもとても名誉なこととされている。そして巫女見習いは数年を氷の中で仮死状態として祈り続けるなど、とても過酷な修業をし、巫女になるのが普通だ。しかし氷結鏡界を維持する結界巫女は皇姫サラを筆頭にして第一位から第5位までの計6人しかない。

それに千年獅になるにはまず護士候補生にならないといけない。護士候補生は正護士になる前の階級で正式な天結宮ソフィアの隊員でもない。そして護士候補生から正護士になるには、少し前とは違い現在は、「褒賞システム」と呼ばれる制度を採用しており、その制度は任務などをこなし、褒賞ポイントを一定量までためることで正護士になることができる。そして正護士でやっと天結宮ソフィアの正式な護士となり、その上には鍊護士と呼ばれる階級がある。鍊護士は天結宮ソフィアの中でも精鋭が集まる階級で、千年獅とほぼ同じ実力を有しており、ここまでするだけで数年はかかるはずだ。そしてそこからさらに巫女に選ばれないと千年獅にはなれない。

なのに、だ

サラは天結宮ソフィアにただ勧誘するのではなく、いきなり最上位階級の階級にならないかといってきたのだ。

俺達はこの世界に来た時から天結宮ソフィアに入ることを決めていたし、いずれ巫女や千年獅になるうと思っていた。それが今叶おうとしている。

そして俺はこう答えた。

「俺たちでいいなら喜んでるよ、でも俺たちが天結宮ソフィアに入るのは今じゃなくてもいいかな？ サラには今から数ヶ月後に氷結鏡界が破られ幽幻種が襲ってくることを教えたよね。俺達はその時に自由に動きたい。だからそれが終わってからか、その事件の終わる直前まで待つて欲しい。」

「はい、よろこんでお待ちしております。もしよけろしければ、天結宮ソフィアに入るとき私のところに来てくれませんか？」

「うん、わかったよ。ユリもそれでいいよね？」

「うん、それでいいよ」

というようなことがあった。

「さて、これからどうしようか……」

「うーん、やっぱり」

「

ユリがしゃべっている途中に天結宮ソフィアが震えた。

「もしかして、この音って！」

「アリア、下の階にいる巫女のところに転移するからこつち来て！」
アリアはいそいでユリに触れるくらいの距離まで近づいた。そして二人の足元には奇妙な模様が浮かび上がっている。この模様はユリの前いた世界で言う魔法陣とよばれるものである。

「転移、開始……」

魔法陣が光り、二人は光に包まれていく。光が収まると楽園にはサラしかないなかった。

あの子たちを頼みましたよ

サラの呟きは誰にも聞かれず楽園に響きわたった。

時は天結宮^{ソフィア}が震える少し前に戻る

シエルティスは241階でレオンと会いレオンから数年前までパートナー^{イリス}だった機械水晶を受け取り、281階の大聖堂を守る巫女二人を助けるため上を目指して281階まで来た。シエルティスは途中の階の幽幻種を倒しながらここまで来た。双剣を両手に持つ少年の右肩と背中には骨に到達するまで幽幻種の爪にえぐられていた。

そして、今シエルティスは思わず見上げるほどの巨大な扉の前にいた。

荘重かつ鮮やかなレリーフがどこされた金属製の扉。その扉が青く淡い輝きに満ちていた。

「沁力で守られた扉？」

『……鍵はかかっていません。扉を開けてみてください。』

言われるま^mが二扉の取っ手に手をかざし。

チヂ……チツ！……

「っ……なっ……！」

突如、雷光を思わせる青白い火花が迸った。その衝撃に吹き飛ばそうになるのをかろうじて堪える。いま、たしかに扉に手を弾かれた。

「……まさか、エルベルト共鳴……！？……こんなときに……！」

白く火傷した手の傷も忘れ、シエルティスは眼前の扉を睨みつけた。

エルベルト共鳴。

真逆の属性を持つ人の沁力と幽幻種の魔笛　そのなかでも、特に強力な沁力と魔笛同士が接触した場合に生じる現象だ。二つの力が磁石の同極のようにお互いを拒絶し、物理法則をもねじまげて強力な火花が放出される。

大聖堂の扉は氷結鏡界の力を受けるように設計されている。つまりこの扉自身が強力な沁力結界として機能している。

そう、弾かれた理由はシェルティスの身体に宿る魔笛が強すぎるから…

そして、^{ソフィア}天結宮が震えた。

ゴツ、とい地鳴りと破砕音。振動はすぐ真正面、大聖堂の内部から。まるで大砲が^{ソフィア}天結宮の外壁で着弾したような激震だった。

「まさか……」

『統率個体です。外壁を食い破って大聖堂の内部に侵入した模様』

「ユミイっ！」

喉を枯らして叫ぶも、固く閉ざされた扉を前にしては届かない。そう届かない。声も、自分の思いも何もかも。

「……イリス！」

懇願するような気持ちでイリスに向かって叫んだ。

「イリス、何か方法は？！なんでもいいんだ、なんとか扉を開ける方法は？！」

『あるとすれば、あなたの身体を蝕む魔笛が消え去るか、あるいは逆に、この扉を守る沁力と同等の、つまり氷結鏡界と同等の魔笛をもってすれば……でも、そんなものあるはずが』

…氷結鏡界と同等の魔笛。

そういえば、ユミイから聞いた覚えがある。氷結鏡界を支える皇姫と巫女には、結界を維持する祈りの歌があるのだと。はるか上空へと続くことから天結宮ソフィアとよばれる塔。その最上階で奏でられる旋律コードだからこそ、その歌は『第七天音律ソフィアコード』と名付けられているのだと。

究極の沁力結界である氷結結界と、それを作動させる歌。

それと同等のものがあるとするならば、それはきつと穢歌の庭エデンそのものの

穢歌の庭エデンの……旋律コード……？

「……ある」

『シエルティス、いま何と？』

……あるじゃないか。穢歌の庭エデンの最奥まで落下した時のこと。

あの日、

世界の終りの場所で

確かに僕は、穢歌の庭エデンに流れる歌声を聴いていた。

「ある。…あるよ、イリス。」

『シエルティスということですか？まさか』

「
見つけたんだ、この扉を開ける方法。」

そう、答えはあの時、

落下した穢歌の庭に^{エテン}答えはあった。

スロディー
魔笛

『^{エテンコード}
第七真音律』

O e / D i x o l e 〓 E , p i l e n o a m y i z i s
e g i c

(夢、理想の空隙へ沈み)

O e / D i x s h e l 〓 E , c r o s s K y e l s o l i
t x e s M i q i s I

(願、現世の孤独へ帰る)

その瞬間。

大聖堂の内部に侵入していたすべての幽幻種の動きが止まった。

c l a r d a c k t , m i h a s / x - m a d e l , e l m e
i u a l e n l i h i t t i - o y u l i s

(歌潰え、絆は断たれ、祈りの一切空虚を望み)

S e r a , X e l e s l i n k y e l c i e l i s c l
e y

(そしてまた、わたしも彼方の地へと旅立とう)

x e o s l o a r s i s f l a n - s - k e e n , N e l s

is hiz tinny xes riris tes Zal
ah

(夜のかぜは 冷たく、鋭くそれは約束と福音の物語)

kamis wire/x-gorn zay nazalis
rel

(罪色の雨は、記憶の筐を錆びつかせ)

Nid hiz loar nec cross-Oz-yuli
s noa missis ciel

(もはや帰ることのない風は、遥かなる彼方へと消えていく)

ユミイは大聖堂に聞こえてきた旋律^{コード}に聞き入っていた。

Oe/kypne Xe yaherria ole/en-da
ckt stery

(眠れよ我が身 全て千々に潰えた夢のため)

Oe/iden Xe uirse, ria elmeiua
len

(沈めよ我が時 全て一切の祈りのために)

Oe/kills Xehaul,riamihax-x-ma
del zayxus

(凍れよ我が灯 全て永劫に断たれし絆のために)

……うそでしょ

旋律でも詩でもない。それ以上にユミイはその歌の『声』にみみを澄ませていた。決して幽幻種のものじゃない。

「……うそ、だつて……」

すぐには信じられなかった。なぜならばその声は、自分のよく知っているあの少年のもので

「E mille-Ye-kypn pheno」E Mil
kiss hiz qelnob, belit elmei Ede
ncia iden

（さあ 生まれ眠る子よ 見届けなさい、楽園の全てが沈んでも）

ris-sia sophia, X ele dia kye l r
iris is Uls

（それでもなお、近いの丘へと私は歩く）

俺は今大聖堂の内部に転移してきて隠れている。そして俺達は旋律^{コード}に聞き入っていた

そして、重々しい音と共に、大聖堂の扉が開いていく。

氷結鏡界に限りなく近い結界を張り巡らせた扉。幽幻種では絶対に開けられないはずの聖なる扉が、自ら封印を解いていく。

今シエルティスに顔を知られるのはやめておきたい、原作ではシエ

ルティスは戦いが統率個体との戦闘が終わりユミィと会話したあと
気を失うはず。俺達はそれまで隠れておくことにした。

O e / s s i a E d e n , O l e e l e , S e l a h p h
e n o s s i a - s O r b i e C l e y
(全ての夢見る世界のために)

開放された扉のそのさきに、たった一人の少年が立っていた。

ゆっくりとその少年がユミィの方へ振り向いた。

「ごめん、ユミィ。ずっと……またせて。」

やばい……ものすごい感動する場面だよ……涙出てきたよ……どうしよう……

ユリの方をみるとゆりも泣いていた。

やっぱり小説読んだ時と違って実際にその場面にいると感動とか全然違うね。

「……………あ……………あつ……………」

まぶたから何かがこぼれ、視界がぼやけていく。

涙が止まらない…ずっと、我慢していたのに。m値の中、張り詰めていた何かがぷつんと途切れたのがわかる。まだ何も終わってないのに…彼がそこにいるだけで、とても大事な何かを守れた気がした。

双剣の少年。自分を守る千年獅になると行ってくれた彼。

シエルティス・マグナ・イールが、立っていた。

5話 新たな千年獅と巫女（後書き）

な、ながかった・・・そして、幽幻種侵入事件 終わりませんでした。

私はちゃんと19時から書き始めたんです。なのに途中でどうやってアリアとユリを千年獅と巫女にするか考えたりして書いてたら11時30分をすぎていることに気づき、一旦切って投稿しました。

だって一日一回更新したいんです。

それとおもったんですが、オリキャラのイメージを描いてみようかなと思いました。その理由は、物語を考えるととき（妄想してるとき）オリキャラのイメージがあると場面の想像とか動いてる映像が想像しやすいからです。

でも咲亜は絵の才能も文才もないので絵は書いてみて100点中30点以上とれたら載せてみようかなと思っています

これからよろしく願います。

次の話で幽幻種侵入事件は終わると思います・・・

6話 世界が原作と変わってきてる？（前書き）

えっと、咲亜です。

5話に漢字変換ミスとキャラの心の中での喋り方が少し可笑しいかな？と

おもったので修正しました。なので内容は変わりませんので読み直さなくても大丈夫です。

これからよろしく願います。

では本編6話はじめます。

6話 世界が原作と変わってきてる？

大聖堂の扉が開いた。

シエルティス・マグナ・イールが、立っていた。

そして、凍てついた時が動き出す。

幽幻種の魔笛が再び流れ、禍々しく輝く光の奔流が大聖堂を照らし出す。だが双剣の少年は、それより早く大聖堂を駆けたいた。

二条の剣閃

右の剣で放たれる魔笛と障壁を破砕し、左の剣で幽幻種の核晶を打ち砕く。魔笛による障壁を完全に無効化されたことに、残る幽幻種からは動揺のざわめき。その虚をついてさらに左右の二体、さらに背後の1体の核晶を破壊する。

次々と少年が幽玄種を打ち倒していき、幽幻種次々と消えていく。

残るは統率個体。

だが少年が振り返った時、いるはずの巨大な幽幻種は忽然と消えていた。

「……………消えた？」

春蕾^{シュンレイ}が当たりを不安そうに見つめる姿。音も無く消えた統率個体。どこに逃げた？ 離れてみていたユミイにもわからなかった。そう、

今もお誰にも気づかれずに隠れてみている二人以外はだれもわからなかった。

ばさっ。大聖堂に開いた壁穴の先、巨大な羽ばたき音が聞こえたのはその時だった。

『大聖堂の外です。この場合は諦めていきます！』
最上階の皇姫を狙っ

少年の胸元でイリスが激しく点滅。

氷結鏡界に集中した皇姫は完全な無防備。……サラ様が攫われる。
誰より浮遊大陸を憂い、自らを犠牲に氷結鏡界を支えてきた人が……

私とアリアは今も隠れて見ている。

すると、統率個体がシェルティスやユミイ、春蕾に気づかれず外壁のそとに飛び出した。もしかして、サラのところに向かうのかな？
もし、向かってるなら助けたほうがいいかな？とか考えていると

「もしあの統率個体が最上階に侵入したらすぐ倒せるように転移の準備だけしておいて」

アリアも私と同じことを考えていたようだった。助けてあげたいけどシェルティスにはなぜここにいるかは言えないから、だから本当の本当に危険な時、シェルティスたちがどうしようもなくなった時以外はみていようと思っていた。

だから私はアリアだけに聞こえるような小さな声ですぐ答えた。

「うん、わかった」

私たちは会話していた時も場面は進んでいた。今はイリスが統率個体の場所を叫んでいた。そしてユミイが叫んだ。

「シエルテイス！」

私はこのままはどうなるか、そう悟った瞬間、私は目の前の少年にむけて叫んでいた。

一度は天結宮^{ソフィア}を追放された少年。そんな彼にこんなこと願うこと自体、どれだけ自分勝手なことかは分かっている。なんて都合の良い願いなのかも分かっている。

……それでも、頼らずに入られなかった。

この場でそれができるただひとりの人間だから？ううん、違う。……たとえこの場にレオンがいても爛がいても、わたしは……目の前の彼に頼りたかった。

巫女は自分の全てを、ただ一人の千年獅^{バートナー}に託すものだから。

その意味が、ようやくわかった。

「シエルティス……お願い！」

だから私は叫んだ。

ずっと探してた、自分の全てを託せる少年に向けて。

「サラ様を……うつり、みんなの浮遊大陸を……守って！」

その少年は自分に向かって振り返った。目止め、視線と視線が重なって

……シエルティス、笑ってた？

一瞬の余韻を残し少年は壁の大穴から天結宮の外へと身を躍らせた。

高度二千メートルの空域、天結宮の最上階へと飛行する幽幻種を追いかけて。

シエルティスが外に飛び出したときにどこからか「わあ」と聞こえたような気がしたけれど、ここには私とシエルティス、春蕾しかないはず。だからたぶん聞き間違えだと思う。

あ、危なかった…さつきは思わず声出ちゃったよ。だって、本の中なら「へえ」がンばるね」と軽く流せるんだけど、実際見ると驚きが多すぎて……

それは置いて。今シエルティスが外から戻ってきた。シエルティスの身体を見ると腕からは血がドクドクと流れておりとても痛そうだった。けれどシエルティスは自分の幼なじみのユミイを見て声を発した。

僕が統率個体を倒し、大聖堂に戻ると大聖堂の内部は決して平穏な状況とはかけ離れたものだった。足元の絨毯は腐食して剥がれ、天井の照明器は濁った黒色にただれている。壁の燭台も魔笛の神職を受けて半ばで折れている。

でも、間に合わなかったわけじゃない。

部屋の中心で、ユミイは着物姿の巫女と共に立っていた。直接的な外傷はもちろん、魔笛を浴びた九通からも今は回復したようだった。

そう、守れた。自分の一番大切な彼女を。

けれどなぜだろう。全て終わったはずなのに、胸を締め付ける緊張がおさまらない。いやむしろ、こうして彼女を前にしている方がはるかに

「あ、あのさ……」

シェルティスはしつしに声をしぼりだした。

「……無事で……よかったよ、本当に」

違う、違うんだ。言いたかったのはそんな言葉じゃない。そう分か
つていても、口にできたのはそんな平凡なものだけで。けれどその
p 半面、そんな拙い言葉だけでも伝えられたことが嬉しくて。

「……………」

少女は下をむいたまま答えない。

「そう……………だね。ユミイは巫女だものね。きっと、こうして言
葉をかけられるだけでも……………一般人の僕には出来すぎたことだね。」

未曾有の災厄から天結宮ソフィアを守ることができた。ユミイも無事だし、
彼女が氷結鏡界を支えれば浮遊大陸オービエ・クレアは助かる。天結宮から追放され
た自分にとっては出来すぎた成果だ。

……本当は、もう一度全部やり直したいって伝えたかったけど。

この場では伝えられない。自体が全て終息して、天結宮ソフィアの機能が落
ち着いてからだ。外部の人間である自分が大聖堂に長いはできない。

「ユミイ……………ごめん、僕が天結宮ソフィアにいたらまずいんだよね。すぐ……
…帰るから」

大聖堂の扉へ、巫女二人に背を向ける。

「……行かないで」

それがユミイからの言葉だと気づいたのは、ふるえる唇を必死に動かそうとする彼女の姿を見たからだだった。

「ば、ばか……シエルティスのばかつ！　なんで……なんで……」

「ずるいよ……やつと来てくれたと思ったのに……何も、言わ……
…っないで……なんでまた、どこか行っちゃおうとするの?!　わたし……ずっと待っていた……のに」

「……ユミイ」

「おかえり……ようやく、来てくれたんだね」

両手を広げた少女が、微笑の眼差しでゆっくりと歩いてくる。静かな大聖堂で、二人は互いに手を伸ばし。その指先が確かに触れたその刹那。

少年と少女は、全く同時に二年前あのときの悲劇を思い出した。

チヂ……チッ!……

二人をつなぐ手と手の間に雷光さながらの青白い火花が迸った。

エルベルト共鳴。

強すぎる沁力と魔笛が重なったとき、それは物理減少をも捻じ曲げて待機中に放電現象として現れ、接触した者たちを炎で裁く。

チヂ……ヂッ！……

重なる指と指を、雷光さながらの火花が容赦なく灼き焦がす。

「あ……っ！」

悲鳴にもならない声を上げて、少女がその衝撃で吹き飛ばされた。

「ユミィっ！」

「……あ……ははっ………」

返事は、乾いて錆び付いた笑い声だった。

「……二年前と……これも、

」

俺とユリはしばらく二人のやり取りを見ていた。これで幽幻種侵入事件は終わった。そう思っていた時だった。

グオオオオツ

大穴が開いた壁からさっきの統率個体より大きい竜型の幽幻種が入ってきた。シエルティスがユミイを守るように少女の前に立ち双剣を構え幽幻種に向かって駆ける。

……原作と変わってきてる？これもイレギュラーのせい？それとも俺たちがこの世界に来たから？

そういえば、幽幻種が氷結鏡界を破って侵入した数も原作より多かった気がする。

「ユリ！緊急事態だ！でるよ！」

「私は巫女二人を守るから、アリアはシエルティスと幽幻種をお願い！」

「わかった」

俺とユリは巫女二人とシエルティス、幽幻種がいるところに向かって走り出した。

シエルティスは双剣で幽幻種に切りかかるも双剣は弾かれ、幽幻種に殴り飛ばされたっていうのかな？とにかく吹き飛ばされて、巫女、ユミイと春蕾がいる方へ飛んでいった。俺は走っているスピードを上げ、シエルティスと巫女二人の間で止まった。

「シエルティス！」

後ろでユミイが叫ぶ、と同時にシエルティスが飛んでくる。俺はシエルティスを受け止めようとした

そう、俺は忘れていた。俺達はサラより強い沁力を持っていることを、シエルティスは強い魔笛を持っていることを…

俺がシエルティスを受け止めようとした瞬間

チヂチ……ヂッ……バリッ………バチッ……

エルベルト共鳴。

さっきのシエルティスとユミイのエルベルト共鳴の比でないほど強力な青白い火花が出る。

「……っ！」

あまりの激痛にすこし声が出てしまった。シエルティスは気絶したようだ。それほどエルベルト共鳴が強かったということだ。

「あなたたちは一体…それにあのエルベルト共鳴…」

後ろからユミイが聞いてくる。シエルティスが気絶して話を聞いていない今なら話ができる。ユリもそう思ったみたいだった。

「私たちはあなたたちの味方です。私は六人目の巫女、ユリ・ミストルティンです。そしてそっちはアリア・ミルメスト。私の千年獅です」

「アリア・ミルメストです。六人目の巫女の千年獅です」

なぜか丁寧口調になってしまった。

「それとなぜさつきより強力なエルベルト共鳴が起きたかという
話はあとでします。先にあの巨大な幽幻種を倒さない
と」

話している途中に巨大な幽幻種まず巨大な雄叫びをあげ、次に魔笛
をとねえはじめた。

シエルティスが勝てなかった幽幻種だ。魔笛もとてつもなく強いも
のだろう。だとしたらその魔笛が発動する前に倒すのが賢明だ。俺
は直ぐ様幽幻種の方へ向き変える。

「魔笛っ!？」

後ろで何か言ってるけれど、俺はシエルティスの双剣よりすこし大
きい剣を具現化させる。現れた剣は、どことなく聖なる気が漂って
いる。そしてその剣はシエルティスの剣と違い、水晶のように透き
通ってはいなかった。

アリアは剣を片手で構え走り出す、しかし走り出してすぐにその姿
が消えた。次の瞬間には幽幻種の目の前にいた。アリアは剣を両手
で握りいともかんとんに首を切り落とし、幽幻種の核晶を貫いた。

核晶が砕けた幽幻種は霧状となって消滅した。アリアは剣を消し、
ユリたちの方へ歩き出す。

私は今見たことが信じられなかった。

最初は、六人目の巫女を名乗る人が現れて、その千年獅も現れた。そしてなによりその千年獅が突き飛ばされたシエルティスをキャッチしようとしたらエルベルト共鳴が起きた事。

エルベルト共鳴は強い沁力と魔笛が重なり合うと起きる自然現象。

そのエルベルト共鳴は私の時よりも強力で、千年獅の少女アリアちゃんは激痛のあまりかすかに声を上げていた、シエルティスは激痛で気を失っていた。

千年獅の少女は剣を作り出し、構えて幽幻種に向かって走り出した。そして消えた。次見えたときは幽幻種の目の前で、アリアちゃんによってすぐに幽幻種は消滅した。

アリアちゃんは歩いてこっちに戻ってきた。

アリアちゃんは私より強い沁力を持っていて、シエルティスよりも強い

とても幼い少女二人が私たちを助けてくれた。

「わたし…あなたたちのこと……しら…ない…」

春蕾は私たちを助けてくれた二人のことを知らなかった。

私も二人の事は知らない。もし本当に巫女と千年獅なら、私たちは知っているはず、それにこの年で巫女や千年獅になれるものなの？ そついった考えが頭の中を駆け巡る。

「えっと…私たちは、さつきサラに……サラ様に巫女と千年獅にしてもらったんです。」

えつ、今ユリちゃんは一回、サラ様のこと呼び捨てにしなかった？ それにさつき巫女と千年獅になったって………どういふことなんだろう……

「えっと…ユリちゃん、巫女と千年獅にしてもらったってどういふことなの？」

「私たちは巫女見習いや錬護士などは飛ばして、巫女と千年獅にしてもらったんです。してもらったと言うか…サラに巫女と千年獅になりませんか？って言われてですけど」

…そんなことあるの？それにサラ様のことをもう普通に呼び捨てで呼んでる。もしかしてサラ様の知り合いの人なのかな？

「サラ様の知り合いの人とかですか？」

私は思い切って聞いてみました。すると答えてくれたのはアリアちゃんでもユリちゃんでも、ましてや春蕾でもありませんでした。そう答えてくれたのは

『はい、アリアとユリは私の知り合いです。その二人は私が巫女と千年獅に誘いました。』

「えっ、さ、サラ様、どうしてここに!？」

私は驚きすぎて何を言ってるのかわからなかった。

「あ、サラ、これから巫女と千年獅全員集めて、俺達のことや、挨拶したいんだけど。よかつたらみんなを呼んでくれないかな？ それとユミイ、これは念話だから「どうしてここに?!」っていうのはおかしいと思うよ」

『そうですよ、ユミイこれは念話です。なのでその言い方は変ですよ。それはまあいいでしょう。巫女と千年獅を全員呼べいいんですね?』

「うん、任せるね」

私はさらに驚いた。だっていきなり現れた千年獅アリアちゃんは自分のことを俺と呼び……そのことじゃなくて!アリアちゃんとサラ様が普通にタメ口で会話をしていることに。

それとアリアちゃんは可愛いんだから俺とか言っただけで欲しくないかな。

「アリアちゃん、せっかく可愛い女の子なんだから、俺とか言わないで私って言ったほうがいいと思うよ」

私がそう言つとアリアちゃんはなぜか顔を赤くして叫んだ

「お…俺はお、と、こ、だ!..」

え、今アリアちゃんが自分のことを男の子って言っただけなの…

でも、こんなに可愛い男の子がいるはずが・・・

「ここにいるから!!」

あれ、今私なにもいってないよね、心読まれた?!

「俺は男なの。」

「それはいいとして、巫女と千年獅を全員集めるんだよね?なら違うところがいいんじゃないかな?」

そうだった。これからちゃんとした発表があるはずなのだ。でもシエルティスはまだ眠ってる。どうしよう…

するとアリアがまた私の心を読んだのか、

「俺達はシエルティスにまだ知られるわけにはいかない。だからシエルティスは救護階へ。なぜ知られたらいけないのかは後で話すよ。それにユミイはシエルティスとはこれから何回も会うことになると思うよ」

「うん、わかった。それと、私がシエルティストこれから何回も会うことになるっていうのはどういうことなの?」

「それもあとで話すよ」

そしてシエルティスは救護階へ、私たちは269階にある会議室へ向かった

俺達は269階F会議室で30分待ちやつと全員揃った。みんな疲れていて何人かはところどころ怪我をしている。そしてみんな俺とユリの方を見ている。確かに巫女と千年獅が全員集められて、まだ巫女と千年獅になった俺たちのことを知らない人から見れば、部外者だろう。

そして千年獅の一人が話しかけてきた。そう、あの時あった娘だ。

「あ、お前は！ さっきは助かったぜ！けどなんでここにいるんだ？」

「爛、この二人の少女のこと知ってるのか？」

レオンが爛に聞く。そうアリアにとって禁句を交えて

「俺は男だー！！！」

「「「「「え！？」「」「」「」

え……みんな驚かないでよ……確かにすこし女の子っぽいけどさ……俺男……だよ……？

どうしよう……悲しくて涙出てきた……

「ぐす……ぐす……う……う……」

俺はサラ様に呼び出され、269階F会議室に来ていた。そこには巫女と千年獅が全員集まっていて、さらに知らない二人の少女がいた。

そして俺はただ、爛にこの二人の少女知ってるか？ と聞いただけだ。そしてその少女の一人が俺は男だー！！と言い、思わず えっ？！ と言ってしまった。

すると少年？は泣き出してしまった。

これは俺のせいなのだろうか。

そう考えていると知らない二人の内の少女のほうが少年？に抱きついて、「アリアは男の子だよ、私がそう知ってるから、泣き止んで」と頭を撫でながら慰めていた。

すると少年…アリアと呼ばれていたのもその少年の名前はアリアなのである。アリアはすぐに泣き止みしばらく少女と抱きついていった。そしてこの状況がいつまで続くのかと思い出した時

『みんなそろったようですね。それにアリアは災難でしたね。そしてなぜ巫女と千年獅であるあなたたちを全員呼んだかというと、あなたたちにこの子達を紹介したかったからです。ではアリア、ユリお願いしますね』

サラ様がそう言うと、二人は抱き合つのを止めユリと呼ばれた少女が話し出した。

「私はユリ・ミストルティンといいます。今日、六人目の巫女になりました。これからよろしくお願いします」

な、今なんて言った…

確か六人目の巫女と、……え？六人目？？

「俺はアリア、アリア・ミルメスト。今日からユリの千年獅になります。これからよろしくお願いします」

今度は千年獅！？

「なぜこうなったかと言うと、それは……サラ、説明任せた！」

ぶはッ！！！！

アリア、今サラ様を呼び捨てにして説明を押し付けやがった……

『では、私が説明しましょう。なぜこうなったのかといいますとそれは、私がこの子たちの力を知り、味方になって欲しかったので巫女と千年獅になってくれませんか頼んだからです』

「二人はどのくらいの力があるんだ？」

「こいつらは、めっちゃ強いぜ！なんせあの時二人とも一撃で幽幻種百体位ぶっ倒してたし」

「 「 「 「 「 なっ ！ ！ 「 「 「 「 「

「それに、普通沁力の術式って結界系・降臨系・領域系・礼讃系・洗礼系の５つだろ？でもこの二人は魔法系つつう新しい系統を創って使ってた。さらにものすごい沁力だったぜ」

「魔法系？なんだそれは。それとものすごい沁力ってどのくらいの沁力なんだ？」

「ええと、魔法系というのは私とアリアが創ったもので、簡単に言うとな元からある5つの系統にはないものを詰め込んだのが魔法系です。あと沁力ですが、私はサラの2000倍くらいの量の沁力を持っています。」

「あ、沁力は俺も一応あるよ。量はサラの10000倍くらいだけど」

「えええええ！？」

その後しばらく会話が続きアリアとユリは巫女と千年獅の仲間入りとなった。

しかし、アリアとユリはサラに頼まれてなったとはいえ、護士や巫女見習いを飛ばしており、正式に発表するのはやめておこうとなり、二人は幻の六人目となった。

二人の正体を知っているのは巫女と千年獅にサラだけである。

6話 世界が原作と変わってきてる？（後書き）

まず、オリジナル設定かどうかはわかりませんが

沁力は女の人のみが持っている ということにしました。

アリアは例外です！！

それとキャラ崩壊してるかもしれません。

最後の方セリフばかりになっちゃった…

これで幽幻種侵入事件を終わります

7話？ アンケートとお知らせ（前書き）

こんにちは咲亜です…

今回7話は 千年獅が護士候補生?! をしようと思っていたのですが

何とちょうどキリがいいところまで行き、晩ご飯食べていました。

晩ご飯食べてパソコン見ると…

なぜかパソコンがすべてのページを閉じていたのです…

そうです、自分的には結構な量の7話が…消えてしまったのです。

咲亜は消えた7話と同じ内容は書けないです。

それと、今日は書きたくなくなりました…

なので明日、消えた7話以上の話を作ろうと思っています。

自分勝手なのはわかっていますが、今回は勘弁してください…

7話？ アンケートとお知らせ

くお知らせく

6話の誤字を修正、ユリの心の中でのサラの呼び方修正を行いました。

ほかにも間違っているところがあれば指摘お願いします。

アリアとユリのイメージ決めました！！

アリアは…

咲亜の大好きなメロンパンをよく食べている少女、

シャナにしました。

見た目はシャナで髪は黒色、瞳は紅い、…あれ、これシャナそのままなのでは…

…あ、アリアはシャナとほぼ同じ感じということに…

そしてユリは

同じくシャナに出てくるヘカテーにしました。

髪はヘカテーの青っぽい色とは違い金髪で、長さは腰の少し上くらい、瞳は蒼色。

すこし想像しにくいですが自分的には気に入っています。

だれかイメージ画書いてくれたらうれしいのですが…

昨日2時から頑張つて書いたんです。

そしたらなんとも言えない感じになりました。・・・

〈アンケート〉

今まで視点変更するときは誰の視点か書いていませんでした。なので1つ目のアンケートは

1、視点変更時、誰の視点か書いたほうがいい。 YES、NO

もうひとつはアリアとユリについてです。

自分は次の話からイチャイチャさせようと思っていたんですが、これから少しずつアリアとユリが両思いになっていき少しずつイチャ

イチャさせていくのもいいかなと思ったので、

2、アリアとユリはすでにイチャイチャする関係、もしくはこれからイチャイチャする関係のどっちがいいかです。この質問はできれば詳細まで書いてくれると嬉しいです。参考にしたいです。

7話？ アンケートとお知らせ（後書き）

本編でなくてすみません＞＜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7273y/>

氷結鏡界のエデン 目指すはハッピーエンド

2011年11月24日21時49分発行